

モルトマンの宇宙的キリスト論¹

The Cosmic Christology of Moltmann

関口 佐和子
Sawako Sekiguchi

キーワード

宇宙、汎内神論、進化、終末、希望

KEY WORDS

cosmos, panentheism, evolution, eschatology, hope

要旨

ユルゲン・モルトマンは、古代世界は宇宙中心であったと述べ、エコロジーの観点から宇宙的キリスト論を提唱する。しかし現代における宇宙論は古代のそれとはかけ離れていて、宇宙は果てしもない空虚であるという印象がある。モルトマンの述べる宇宙的キリストはその宇宙に意味を与えることができるのであろうか。モルトマンは、宇宙はキリストの身体であると考え、しかしキリスト論にとって宇宙のすべての力をキリストの支配の中に組み込むのは挑戦である。モルトマンの宇宙的キリスト論は歴史的キリスト論を越えて、自然的キリスト論を展開する。モルトマンは汎内神論を採用する。そしてモルトマンはティヤール・ド・シャルダンとカール・ラーナーの進化的キリスト論を批判する。モルトマンは宇宙的キリストによる宇宙的終末論を主張する。その際、救いは全体的である。それゆえ実存主義的な個人の精神への探求は不足している。しかし、われわれは希望によって支えられている精神の内面の宇宙において、いつでもキリストと出会うことができるのである。

SUMMARY

Jürgen Moltmann advocates his cosmic christology from an ecological viewpoint, arguing that the ancient world was cosmocentric. But the cosmology of our time differs radically from that of the ancients. We are under the impression that the cosmos is boundless and vacant. Can the cosmic Christ, whom Moltmann discusses, give meaning to the cosmos? Moltmann pictures the cosmos as the body of Christ. But it is a challenge for christology to incorporate all the power of the cosmos into the rule by the Christ. The cosmic christology of Moltmann develops natural christology beyond the historical one. Moltmann adopts panentheism. And Moltmann criticizes the evolutionary christology of Teilhard de Chardin and of Karl Rahner. Moltmann insists on the cosmic eschatology developed by the cosmic Christ. In this case, he states that salvation is total. Therefore the existential search for the individual spirit is insufficient. But we can always meet Christ in our internal cosmos of spirit that is supported by hope.

はじめに

ユルゲン・モルトマン(Jürgen Moltmann 1926-)は、宇宙的キリスト論(die kosmische Christologie)を提唱した。モルトマンの述べる宇宙的キリスト(der kosmische Christus)が内在すると共に超越するコスモスは、現代においてどのような意味を持つのだろうか。本論では、創造論において汎内神論を展開しつつ、それをキリスト論に関係づけて論述する彼の宇宙的キリスト論を案内し、あわせてその問題点を考察する。

宇宙(コスモス)とキリスト

モルトマンは、エペソ書、コロサイ書の宇宙的キリストのヴィジョンを重視する。天にあるもの地にあるものすべては「宇宙(Kosmos)」である。コスモスとはすべての事物がまとめられたものである。そしてモルトマンは、古代世界はこのコスモスの秩序に従っていたと指摘する。語源であるギリシア語(κόσμος)は、秩序と調和を表現している²。

コスモスの対義語であるカオス(Chaos)という語を使ってモルトマンは、^{カオス}混沌の状態にある現代を表現する。具体的には現代の環境破壊を指している。たしかに人間の破壊力の巨大化は、コスモスの中にカオスをもたらしたと言える。キケローが「要す

るに、わたしたちは、手を用いることによって、自然の中に、いわば第二の自然を生み出すことができる³と述べるように、人間は自然に介入する。そしてそれを混乱させてしまったのである。もちろん逆に考えることも可能である。人間を中心に考えて考えれば、手つかずの自然、生の自然はまさに脅威そのものであり、それから逃れるためにカオスをコスモスに変えてきたとも言える。古代バビロニア人の世界観を使って説明すれば、宇宙の秩序は不規則なものであった。人間を悩ます宇宙は、人間によって整えられてきたのである。しかしモルトマンは人間中心主義（Anthropozentrik）ではなく宇宙中心主義（Kosmozentrik）を唱道する。たとえば人間のみならず植物や動物の権利を法制化することをも主張する。しかしそこには新たなカオスを創り出す危険もあることを忘れてはならない。動物愛護から始まった日本の「生類憐れみの令」のように、その範囲を拡大しすぎて一般市民の生活に支障をきたす行き過ぎが起こることもありうる。モルトマンはカオスではなくコスモスを目指すために、キリスト論とコスモロジーを結合させようとしているのであるから、宇宙中心主義は思慮深く実践されなくてはならない。

キリスト論は現代の宇宙論から挑戦を受けている。古代の宇宙論と、近代を経てさらに展開した現代の宇宙論の間には大きな開きがあるからである。16世紀にコペルニクスが唱えた地動説は、アリストテレス的宇宙観を打破した。17世紀には、ガリレイは地動説を唱えて宗教裁判にかけられ、ニュートンとライブニッツの間で、空間についての神学的・自然科学的論争が起きたにしても、それまでのキリスト教的宇宙観、世界観は逆転させられたのである。モルトマンは15世紀から17世紀にかけて起こったこの移行のプロセスを、『創造における神』の中で「近代精神の最も重要で最も驚嘆すべき発展の一つである」⁴と評価する。

その一方で、2001年にはNASAのハッブル望遠鏡が約150億光年離れた惑星の大気の成分を観測した⁵。同じく『創造における神』の中でモルトマンは「無限の宇宙への移行の実存的側面において、新しい生活感情が生じる。それは、世界の調和の中で人間が汎神論的に居住しているという勝利感ではなく、逆に世界の果ても知らない空虚の中にすぎるものもなく見捨てられている虚無主義的感情、空虚への恐怖（Horror vacui）である」⁶と述べて、現代のこの虚無性を予感したパスカルの「この無限の空間の永遠の沈黙が私を身震いさせる」⁷という言葉を紹介する。有機的な古代の世界観と違って現代には、宇宙は果てしもない空虚であるという印象が広まっている。

さらに、現代の宇宙論を前にすると、宇宙的キリストがナザレのイエスからますます遠ざかるという印象を拭い去ることができない。野呂芳男は『キリスト教神学と開けゆく宇宙』の中で、遙か彼方の星に知的生物が存在する可能性もあるコスモロジーにおいては「ナザレのイエスと呼ばれた男がわれわれのキリスト（救い主）であるこ

との有効性は、大きく考えてもこの地球人類に限定される」⁸と指摘する。

モルトマンは『神の到来』において「自然科学の理論との対話のための連絡場所を苦心してつくり、それが時間の概念において、空間の概念において成功することを望んでいる」⁹。もっとも、神学は、現代の自然科学的理論と次元を異にするとも記している。キリスト教神学論の根拠はキリストの死と甦りの経験であり、宇宙の理解もこの想起された希望の枠の中にあるのである。

『イエス・キリストの道』において、モルトマンはキリストの身体は全宇宙であると述べる。つまりキリストは宇宙として存在しているゆえに、「キリストはつねにより大きい」。宇宙のキリストについて述べることは「宇宙の法則とリズムにキリストを組み入れることではなく、逆にこの宇宙の諸力と法則を、和解を構築するキリストの支配の中に組み入れることを意味している」¹⁰のである。そしてモルトマンは、近代の歴史的キリスト論（die geschichtliche Christologie）はエコロジーのキリスト論に止揚されるべきことを主張する。

汎内神論の理解

モルトマンは『創造における神』の中で「神の世界内在（Weltimmanenz）なしに神の世界超越（Welttranszendenz）を考えることは決してできない。また逆に、神の世界超越なしに進化する神の世界内在を考えることは決してできない」¹¹と述べる。ここで注意したいのは、「進化する（evolutiv）」という言葉である。モルトマンは創造論において汎神論（Pantheismus）を採らず、汎内神論（Panentheismus）を展開するが、「汎内神論は将来の超越、進化と志向性を認識することができる」¹²と考える。西田幾多郎は「万有在神論（Panentheismus）」¹³という訳語を使い、「自らを、汎神論者ではなくして、むしろ万有在神論者であると称している」¹⁴。この西田の概念には将来的終末論も現在の終末論も共に含まれていると理解されうる¹⁵。つまりモルトマンも西田も終末論的将来という視点を採用するのである。しかしモルトマンは現在の終末論という視点は採らない。モルトマンは「現在の『救いの日』は終末論的瞬間の時間的先取りにほかならない」¹⁶と述べ、現在のカイロスと終末論的瞬間を区別する。「先取り（Vorwegnahme）」¹⁷というのは、似ているものを先に経験するということであり、希望の構想力がとらえうる「類比（Analogie）」であるとモルトマンは考える。モルトマンの主張する内在と超越は、静的な「永遠の今」ではなく、「進化」の中に現れるのである。そしてモルトマンはキリストが進化と共に考えられるのなら、それは進化の推進力と言うよりも、進化の犠牲者たちにとっての救済者であると主張する。進化において犠牲の愛を示すキリ

ストにより、モルトマンの汎内神論は成り立っている。

西田幾多郎は、「単に超越的に自己満足的なる神は真の神ではなからう。一面にまた何処までもケノシス的でもなければならぬ。何処までも超越的なるとともに何処までも内在的、何処までも内在的なるとともに何処までも超越的なる神こそ、真に弁証法的なる神であろう」¹⁸と述べる。モルトマンの宇宙的キリストはこの説明に当てはまるであろう。汎内神論的であるということは、西田の言うところの絶対矛盾的自己同一的に絶対弁証法的である。

西田は「新しいキリスト教的世界は、内在的超越のキリストによって開かれるかもしれない」¹⁹と述べる。モルトマンは内在的超越のキリストを主張し、それを宇宙的キリストと呼ぶ。つまり宇宙的キリストは絶対矛盾的自己同一的であり、絶対弁証法的なのである。

そして内在するということは神のケノシスである。モルトマンは、ケノシスは「神の自由な愛の行動」であり、それが神の属性であると主張する²⁰。神がイエスという人間となったことが神のケノシスであり、神の目的は被造物の中に満ちることであろう。沖野政弘はモルトマン神学における汎内神論についての論文の中で「聖霊における神と世界との相互内在を説く三位一体の愛のいのちの創造理解だけが、神の世界超越を神の世界内在と結びつけ統合することができる」²¹と述べる。「三位一体の愛のいのち」が神の世界超越と世界内在を可能にしたとモルトマンは主張するのである。

テイヤール・ド・シャルダンの宇宙的キリスト

テイヤール・ド・シャルダン (Pierre Teilhard de Chardin 1881-1955) は、モルトマンよりも早く「宇宙的キリスト」という思想を展開した。モルトマンは『イエス・キリストの道』においてテイヤールの思想について言及する。テイヤールの著作から、彼の思想について案内し、モルトマンとの比較を試みる。

テイヤールの述べる宇宙的キリスト (Christ Universel) によれば、全宇宙の有機的中心はキリストである。キリストは宇宙生命力の原理である。

テイヤールの根本思想は、宇宙全体をある一点に向かって発展している進化の過程としてとらえる。その進化はダーウィンのように単なる生物進化だけを意味せず、精神的進化 (évolution spirituelle) をも必然のものだとする。テイヤールは宇宙を「物質生命思考 (精神圏 Noosphère)」へと高まりゆく進化の過程としてとらえ、その「人格化する宇宙」の極点に「神秘的な中心」である「オメガ点」があると想定する。キリストを中心とした宇宙はこのオメガ点に収斂される。

このような仕方ではティヤールはカトリシズムと進化論を融合させようと努力した。キリスト教神学は現代の宇宙論と両立しえないという批判があるが²²、ティヤールはキリスト教と自然科学を結びつけようとした。このティヤールの立場についてモルトマンは『神の到来』の中で次のように述べる。「私たちは、終末論と宇宙論をいっしょにして考えるいくつかの包括的試みをもっている。ティヤール・ド・シャルダン、進化の概念の助けをかりて、この二つの領域をいっしょにし、『オメガ点』という終局の形而上学を企画した」²³。モルトマンはティヤールと同じく、「新しい天と地」を強調する。彼によれば、それなしには人間の救いは考えられないのである。

ティヤールの死生観に従えば、キリストは死と甦りを通じて宇宙の中心として君臨することになる。それゆえわれわれも一度死んで、自己中心的なものから脱出して神と合一しなければならない。死はわれわれを神に向かって解放するのである。われわれは神との結合の希望に向けて愛と放棄を行わなければならない。

このティヤールの進化的キリスト論に対するモルトマンの批判は、ティヤールの思想に進化の犠牲者への配慮が足りないというところにある。この批判は、「自己超越」という概念を見いだしたカール・ラーナーの宇宙的キリスト論に対しても同じように向けられる。しかし三者は、キリストを未来における頂点と見なす点では共通する。また物質に内在する神の霊の動きという見解でも一致する。「キリストがその受肉をとおして、どれほど世界に内在化し、極微の原子核に至るまで世界内に深く根づいているか」²⁴というティヤールの記述は、モルトマンやラーナーにも相通じるものである。

終末における宇宙的キリスト

モルトマンによれば「キリスト教的終末論は、宇宙的終末論へと拡大されなければならない。そうでなければ、グノーシスの救済論となり」²⁵ 身体の救済が抜け落ちてしまうからである。したがってキリスト論も宇宙的キリスト論によって初めて完成されるとモルトマンは考える。キリストによる全宇宙の和解(コロサイ 1.20)は、権利を失い傷ついたすべての被造物の義認によって有効となる。それゆえ人間の神との和解は、自然を包含していなければならないというのがモルトマンの主張である。

モルトマンは終末論において神の自己実現ではなく、三一論的な神の栄光化を強調する。父と子と霊の一致の中に全被造物が統合させられるのである。

モルトマンの述べる宇宙的キリストは、われわれの目を歴史の犠牲者や自然に向けさせる。キリストは進化の頂点ではなく、自然という弱い被造物の中に現臨する。そのすべての傷ついた被造物が、全和解によって救われるのは、現代人にとって大きな希望である。

おわりに

モルトマンの宇宙的キリスト論は、人間だけでなくその舞台装置である自然 (Natur) を重要視する。モルトマンの宇宙的キリスト論は、歴史的キリスト論を越えて、自然的キリスト論を展開する。

モルトマンの宇宙的キリスト論はダイナミックではあるが、個人の内面の救いとどのように関係するのであろうか。人間はコスモスの一部であるということに満足できるのであろうか。D・H・ロレンスは彼の著書『現代人は愛しうるか 黙示録論』の中で、「人間が最も激しく冀求するものは、その生ける完全性であり、生ける連帯性であって、己が<魂>の孤立した救いというがごときものでは決してない」²⁶と述べるが、この主張はモルトマンと似ている。ロレンスは「コスモスの一部であるという歓喜に陶醉すべき」²⁷とまで述べる。モルトマン流に言えば「宇宙的キリストの身体の一部であるという歓喜に陶醉すべき」ということになるのであろうか。モルトマンの宇宙的終末論は実存主義へとは向かわず、救いはいつも全体的である。モルトマンは「個人の生は死すべきものであるが、集会的生は不死である」²⁸と全体性を強調する。たしかに個人の魂の孤立した救いというのは、真に人間が希求しているものではないのかもしれない。われわれは他の被造物との連帯性や完全性を望む。けれども個人の内面というのは宇宙に匹敵するものではないだろうか。ヘーゲルは一人一人の姿のままに人間に意味をもたせようとする。ヘーゲルの即自 (an sich) は、全と個が未だ区別されていない状態であるが、即且つ対自 (an und für sich) は完成態である。モルトマンの宇宙的キリスト論には、実存主義的な内面性への探求が不足していると言えよう。ヘーゲルに代表される近代の主体性をモルトマンは掘り下げなかった。それよりも古代のように宇宙論的・神中心的に考えようとした。沖野政弘がモルトマンについて「彼の三位一体的聖書解釈学は、共同体と関係を活性化していく思考へと導き、対象から分離し孤立化する近代・現代の主体的思考を克服しようとするのである」²⁹と述べるように、モルトマンは主体性を越えて共同性を重視するのである。

さらにモルトマンの宇宙的キリスト論には、そのパラダイムの変換において「罪」や「救済」の問題が薄れてしまう傾向があるのではないだろうか。開けゆく宇宙に対応するキリスト論の再吟味はエコロジーの観点からだけでなく、さらに別の観点からの考察が必要になるであろう。

単に超越的な神ではなく、すべてのものに内在する神は自己否定の神である。それは人間に対する神の愛である。宇宙的キリスト論の根拠はイエスの十字架の死と甦りであるが、イエスの十字架は全被造物と神との和解であると同時に、個人と神との和解でもある。そのキリストが万物において現臨している。宇宙のすべてが神の現臨の

場であれば、われわれは神の身体である宇宙において、また個人の内面の宇宙においていつでも神と出会うのである。そこに救いへの道があるのであろう。しかしモルトマンの終末論によれば本当の全和解は未来においてしか行われない。われわれはそれを信じて不安を払拭し、希望を持つしかないのである。モルトマンは希望の信仰は聖霊によって神から恩恵として与えられると説く。宇宙的キリスト論の希望は聖霊によって支えられているのである。

ところで「宇宙のキリスト」という考え方は宗教間対話を可能にするのであろうか。キリストは他宗教の中においても自らを証しするという考え方は有効なのであろうか。モルトマンは徹底的にキリスト化された宇宙を考えているが、キリスト教と共通項を持たない宗教との対話は困難が予想される。たとえば仏教には天地創造という発想がない。モルトマンはその際の支点として、「自然」を念頭に置く。さらに聖霊論も重要であるとモルトマンは考える。新しい宇宙的キリスト論の概念構築には、従来の聖霊論の見直しが必要となってくるであろう。

注

- 1 本論文は、2003年3月に開催された日本基督教学会近畿支部会での研究発表に加筆・訂正をしたものである。
- 2 モルトマンは日本語では同じく「宇宙」と訳す *Universum* という語もまた使っている。この語は一つとなった「神の国」という意味合いでもって使われる傾向がある。モルトマンは『神の到来』という著書の中の末尾で、終末において万物が変容した後の宇宙を *Universum* と記述するのである。(Vgl. J. Moltmann, *Das Kommen Gottes; Christliche Eschatologie*, Gütersloh: Chr.Kaiser/Gütersloher Verlagshaus, 1995, S.367=『神の到来 キリスト教的終末論』蓮見和男訳、新教出版社、1996年、499頁参照。)
- 3 『キケロー選集11』「神々の本性について」山下太郎訳、岩波書店、2000年、187頁。
- 4 J. Moltmann, *Gott in der Schöpfung; Ökologische Schöpfungslehre*, Gütersloh: Chr. Kaiser / Gütersloher Verlagshaus, 1985, S.151=『創造における神 生態論的創造論』沖野政弘訳、新教出版社、1991年、214頁。
- 5 京都新聞、11月28日。
- 6 *Gott in der Schöpfung*, S.152. 邦訳215頁。
- 7 *Ibid.*, S.152. 邦訳215頁。
- 8 野呂芳男『キリスト教神学と開けゆく宇宙』松鶴亭、1996年、31頁。
- 9 *Das Kommen Gottes*, S.287. 邦訳391頁。

- 10 J. Moltmann, *Der Weg Jesu Christi; Christologie in messianischen Dimensionen*, München: Chr. Kaiser Verlag, 1989, S.301= 『イエス・キリストの道　メシア的次元におけるキリスト論』蓮見和男訳、新教出版社、1992年、430頁。
- 11 *Gott in der Schöpfung*, S.213. 邦訳304頁。
- 12 *Ibid.*, S.115. 邦訳159頁。
- 13 『西田幾多郎哲学論集』上田閑照編、岩波書店、1989年、329頁。
- 14 花岡永子『絶対無の哲学　西田哲学研究入門』世界思想社、2002年、144頁。
- 15 西田幾多郎は「進化」の用語を中心的なテーマとして使わなくても、後半期に歴史的な世界や歴史の實在の世界を究明しようとしている。「我々の自己は一步一步終末論的に世界の始と終に繋がっているのである」、「宗教は個人の意識上の事ではない。それは歴史的生命の自覚にほかならない」(『西田幾多郎哲学論集』387頁)と述べる。西田の「絶対無の場所」では「永遠の今」と呼ばれる絶対現在と歴史の将来が、共に包摂されていると考えられる(花岡永子『絶対無の哲学』16頁と川村永子『心の宗教哲学　心の自然な構造に即して』新教出版社、1994年、135-139頁参照)。
- 16 *Das Kommen Gottes*, S.323. 邦訳437頁。
- 17 モルトマンは「先取り」という概念を Antizipation や Prolepsis という語でも言い表す。
- 18 『西田幾多郎哲学論集』329頁。
- 19 同上、395頁。
- 20 Vgl. J. Moltmann, *Wissenschaft und Weisheit; Zum Gespräch zwischen Naturwissenschaft und Theologie*, Gütersloh: Chr. Kaiser/Gütersloher Verlagshaus, 2002, S.69ff.
- 21 沖野政弘『現代神学の動向　後期ハイデガーからモルトマンへ』創文社、1999年、234頁。
- 22 クロード・トレモンタン『テイヤール・ド・シャルダン』美田稔訳、新潮社、1966年、98頁参照。
- 23 *Das Kommen Gottes*, S.286. 邦訳389頁。
- 24 P. Teilhard de Chardin, *Science et Christ*, Paris: Éditions du Seuil, 1965, p.62= 『科学とキリスト』渡辺義愛訳、みすず書房、1971年、59頁。
- 25 *Das Kommen Gottes*, S.285. 邦訳388頁。
- 26 D. H. Lawrence, *Apocalypse; with an introduction by Richard Aldington*, London: Heinemann, 1972, p.103= 『現代人は愛しうるか　黙示録論』福田恆存訳、中央公論社、1995年、179頁。
- 27 *Ibid.*, p.103. 邦訳180頁。
- 28 *Das Kommen Gottes*, S.303. 邦訳411頁。
- 29 沖野政弘『現代神学の動向　後期ハイデガーからモルトマンへ』206頁。